2年B組	2B図書コーナーを開こう 三まいのおふだ	沖　香寿美

1　単元設定にあたって

(1)　国語科の授業でめざす学習文化

「比較を通して，楽しく読み味わい，伝え合う力を高める」という国語部のテーマを受けて，次のような考えで取り組んできた。

読みの楽しさは，作品と作品，文と文，ことばとことばなどを比較することによって増すと考えている。共通点や相違点を見つけることができたり，表現の工夫を見出すことができたりする。また，反復構造やことばの意味を確かにとらえることもできる。そのほかにも，一つの作品・文・ことばでは得られない情報を得ることができ，ものの見方，感じ方，考え方を確かにしてくれ，読みの楽しさを味わわせてくれる。

しかし，読みの楽しさを味わう方法は，これだけではない。自分と友達の読みを比較することによっても増していく。自分と友達の意見を比較しながら聞くことは，新たな考えに気づいたり，自分の考えを整理したり，次の課題を生み出したりして，読みの楽しさを増すことにつながるのである。それは，ものの見方，考え方，感じ方を深め，自分と共に友達の向上にもなるのである。

このような読みの楽しさを味わうためには，一人ひとりがかけがえのない存在として学級の中に位置づいていなければならない。個性が認められ，どの子も学級で大切にされなければならない。自分が大切にされれば，自分の考えを安心して伝えるようになるだろう。

伝えようとするときは，「聞いてほしい」「わかってもらいたい」という思いをもっている。自分の考えが友達に伝わるように表現を工夫したり，友達の考えに熱心に耳を傾けたりすることは，互いの心を大切にしようとする気持ちの表れである。

互いの心を大切にする学級には，温かな雰囲気があり，子供の学びを支えてくれる土台になるのである。

互いのよいところを見つけ，認めることはもちろんであるが，どうしたら互いがよりよく伸びていけるか，相手の立場に立って真剣に考え，時には，指摘し合うことも必要である。ほめ合うばかりでないからこそ，自由な発言ができる温かい学級ができると考えた。

本単元では，民話「三枚のお札」を中心に読みの楽しさを追求していった。「三枚のお札」（松谷みよ子作）の絵本のほかに，６つの「三枚のお札」を教材化し，人物の特徴や繰り返しの構造，言葉のリズムなどを比較しながら，民話のおもしろさを味わうことができた。

このほかにも，いくつかの民話の読み聞かせも行なった。

特に，和歌山の民話は，語り部による語りによって楽しさを伝えることができた。子供たちは，身近なところにもすばらしい民話がたくさん伝えられていることを知った。これを通して，民話への関心が高まったことは確かである。

また，自分と友達の読みを比較することによって，自分だけでは気づかなかった民話のおもしろさを味わうことができ，教室にたくさんの民話を置くことができたのはうれしいことである。

(2)　本単元での教師の願い

本単元を設定するにあたり，私は，二つの願いをもった。

一つ目は，日本の伝統的な言語文化にふれながら，民話のおもしろさを味わわせたい。

二つ目は，「図書コーナーを開く」という目的に向かって，本のおもしろさをほかの子どもにも広めていく活動をさせたい，ということである。

今まで行なってきた読書体験は，子供にとって財産であると思っている。これを，自分だけの宝物として心に納めるのではなく，ほかの友達にも広める活動をさせたい。これよって，本の世界を伝えていく楽しさや，理解してもらえる喜びを得ることができ，より本好きの子どもに育つのではないだろうか。また「図書コーナーを開く」過程において思考をめぐらせたり，判断力をはたらかせたり，表現したりしながら，積極的に学習材や友達とかかわることができるのではないかと考えた。

この単元で学習したことが，生涯，読書を楽しむことに少しでも役立てられたらという思いから，取り組みを行った。

（3） 学習材について

民話は，長い間，何世代にもわたって語り継がれてきたものであり，日本の伝統文化の一つである。民話は，空想的な内容が多く，不思議な出来事が読み手を引き付ける。それだけでなく，登場人物の行動が，同じようなパターンで繰り返し語られる。この繰り返しが，読み手の興味を高めていくのである。このほかにも，方言を生かした親しみやすい語り口やおもしろい擬音語，擬態語が使われている。

「三まいのおふだ」は，小坊主が山深く入っていって，やまんばに出会うあたりから緊張が高まっていく。

ぎらぎら光る包丁を研いでいるのを見たときの小坊主の驚きや，おそろしいやまんばにつかまってしまったときの怖さ，波が渦巻くほどの激流を追いかけて来るやまんばの速さなど，想像を広げながら読み進めていった。話の終わりには，あんなに怖かったやまんばが，いとも簡単に和尚の術にはまり，食べられてしまう。「これでおしまい　しゃーんしゃん」とともに，あんなにこわかったお話が終わったとほっとする。子供たちは，人物の行動に目をむけながら読み進め，話の展開のおもしろさを十分味わうことができた。

また，「―けろ」「なんも　みねえ」「ーくろ」などの方言のような会話，「ーだと」「ーがいた」「ーよ」などの語り口，「くった，くった」「まあだ，まあだ」「おふだ，おふだ」「あまだれ」や「呪文」の繰り返しなどがふんだんに使われている。このような，語感や言葉のリズムがおもしろいと感じ取り，ほかの民話にも同じような特徴があることに気づくことができた。

二次では，松谷みよ子の「三まいのおふだ」と，他の６つの「三枚のお札」を教材化し，子供たちはその中から読みたい作品を選択した。それぞれの話には，同じストーリであるが，少しずつ話の展開や，語感，言葉のリズムが違うことに気づいていった。自分が選んだ「三枚のお札」と友達が選んだものを比較することによって，共通点や相違点を見つけるおもしろさを味わい，話の展開や，語感，言葉のリズムのおもしろさを，味わうことができたのである。

多くの作品に触れることによって，日本の伝統文化のすばらしさに気づいてくれたら，という私の願いがかなったことはうれしい。

①　学習材

三まいのおふだ	松谷　みよ子	童心社
三まいのおふだ	小沢　正文	世界文化社
三まいのおふだ	水沢　謙一	福音館
三枚のお札	稲田　和子	こぐま社
三枚のお札	おざわ　としお	福音館
三枚の札コ	稲田　浩二	三省堂

２　実践の考察

(1)人物の行動を比較

２年Ｂ組の子供たちは，本が大好きである。しかし，民話を好んで読んでいる子供は少ない。これ

は，民話がきらいだからではないように思う。今までも「おむすびころりん」や「たぬきの糸車」などの作品を通して，おもしろさを味わっている。民話は，ほかの絵本に比べると数が少ない。だから，手にとって読む機会が少なかったのではないだろうか。

本単元では，松谷みよ子の「三まいのおふだ」の絵本と，６つの「三枚のお札」を教材化した。これらを読むことによって，少しずつ話の展開や，語感，言葉のリズムが違うことに気づき，民話のおもしろさを味わうことにつながるのではないだろうかと考えた。

小坊主が三枚のお札を使ってやっとの思いで，お寺に逃げ帰ってきたのに，和尚が寺の門をなかなかあけてくれない場面がある。ここでは，小坊主と和尚の行動を比較した。子供たちは，小坊主は，早く早くと慌てている。ドンドンドンと門をたたいてあせっている。しかし，和尚は，まてまて，帯を締めてから，まてまて，ぞうりを履いてからなどと，のんびりしている，などの発言を行なった。いずれも，二人の行動の速さの違いに着目した発言が多かった。この速さの違いが，迫ってくるやまんばにつかまってしまうかもしれないと思い，はらはら，どきどきした気持ちを高めてくれる。これが，この場面のおもしろいところということに気づいていった。

（２）視覚による比較

いつ食われてもおかしくないくらい怖いやまんばが，お寺に入ってくる。それが，天井につかえるぐらい大きくなり，怖さが増していく。その大きくなったやまんばが，和尚の呪文で豆粒のように小さくなる。ついには，もちにくるんで最後には，食べられてしまう。大きいものが小さくなる。食べようとしていた者が，反対にたべられてしまうという逆転のおもしろさについて話し合った。文章に書かれている言葉や文からも大きさの違いはとらえられる。しかし，低学年の子供には，文章だけでなく，視覚にたよることで，言葉のもつ意味をしっかりとらえられるものと考えた。そこで，投影機を用意し，天井にとどくぐらいの，私の体の影を作った。その影から，子どもが思っていた大きさより，はるかに大きいやまんばの姿を想像することができた。さらに，影と豆粒と比べた。それは，大きくて，怖いやまんばが，小さくなって食べられてしまうという逆転おもしろさを味わうことにつながった。

この話し合いのとき，「私が選んだ三枚のお札は，はらはらするところが，あまりない。小僧がお寺に着くと，やまんばは，もうお話には出てこない。だからみんなの三枚のお札を読んでみたい。」という発言をした子供がいた。この子供が選んだ「三枚のお札」には，最後の場面でやまんばは登場せず，はらはら，どきどきする場面はない。

この子供は，自分が読んだ「三枚のお札」と友達が選んだものを比較することによって，共通点や相違点を見つけるおもしろさを味わい，話の展開や，語感，言葉のリズムのおもしろさを，感じとることができた。そして，全ての「三枚のお札」を読んでみたいという思いをもち，実際に読み進めた。

子供の発言から

私が選んだ「三枚のお札」には，やまんばがお寺に追いかけてきてからも，はらはら，どきどきするところがありません。小坊主さんが，お寺に帰ってきたところで助かって，そこでお話が終わっています。ほかの「三枚のお札」も読んでみたいです。

ほかの「三枚のお札」を読んで

松谷みよ子さんの絵本が一番おもしろい。絵も迫力があるし，三枚のお札を使ってやっと，やまんばから逃げられたのに，まだ，どきどきが続くところがおもしろい。小坊主さんが，早く早く戸を開けてと言っているのに，和尚さんは，のんびりとしているところが，どきどきする。そこが，おもしろい。

もが，担任に聞いてもらいたいという思いでいっぱいのようだ。一見，活発そうに見える授業風景であるが，発表者の多くは，一方的に話すことに満足している。ほかの子どもたちが話していても，聞いていない場合が多い。そんな中で，この子供は，友達の話に耳を傾け，違いに気づいたり，納得したりしながら，新たな課題を発見し，友達のよさに気づいているのである。

3　今後の課題と展望

本単元では，子供に，民話のおもしろさを味わわせることを主なねらいとした。それを達成するために，複数の「三枚のお札」を学習材として準備した。自分が選んだ学習材を読み，それを紹介し合うのだという気持ちをもつことで，子供一人一人の読みが主体的なものになる。それだけでなく，互いの読みを比較することは，共通点や相違点を発見する楽しさを味わい，話の展開や，語感，言葉のリズムのおもしろさを感じ取ることにつながると考えたからである。

この実践を通して，子供たちは，あまり興味を示していなかった民話のおもしろさを味わうことができた。また，和歌山の民話を持って来たり，家にある民話を持ってきて紹介したりする子供もいた。民話の構成や独特の語り口など，民話そのものへの理解ができたとともに，興味をもって主体的に読むようになったことはうれしい。

複数の学取材を準備したことは，それなりに成果があった。しかし，それらを比較する場合，どれか一つの学習材を元にした授業展開をしていかないと，話し合いが分散したり，一方的に発表するだけに終ってしまう場合がある。それでは，友達の発表を聞いて違いに気づいたり，納得したりしながら，友達のよさに気づくということにはなりにくい。今回のように複数の学習材をもたせたとき，民話のおもしろさをとらえるために，どの部分を比較するのかをよく考えておかなければならない。友達の読みのおもしろさを味わいながら伝え合う力を高めるためにも，深い教材研究が必要である。

伝え合う力を高めるためには，低学年の場合，順序をはっきり示しながら話したり，書いたりする表現力を高める必要があるのではないだろうか。これは，相手意識をしっかりもった上での表現力の高まりである。このことが，土台になってこそ互いの考えを聞き合い，認め合うことができるのである。

4　実践研究テーマの設定

今年度の反省を受け，来年度は二点考えている。一つ目は，相手を意識した対話力を高める工夫である。これは，毎年，力を注いでいることであるが，今年度は，満足のいく取り組みにはならなかった。今までの取り組み方では，通用しないものがあるように感じている。学習方法になるかもしれないが，それを考えていきたい。

もう一つは，と比較を通して楽しく読む説明的文章，物語的文章の授業の工夫を考えていきたい。

〈参考文献〉
和歌山大学教育学部附属小学校　紀要　第22集
和歌山大学教育学部附属小学校　紀要　第24集
月刊国語教育研究　1　No.368　日本国語教育学会編　(2002，12)